創刊の辞

川添　昭二

平成十七年三月、太宰府市当局を始めとする関係各位の深い御理解と温かい御支援、編さん執筆関係者の努力によって『太宰府市史』全十三巻十四冊が完成を見た。この一大修史事業は、アジアの中の日本―大宰府を念頭に置き、大宰府を研究対象とする太宰府学の構築・実践をめざすものであった。

その編さん事業の過程で、修史的作業の継続、その成果の市民への還元、行政資料の処理等々の問題を市史編集委員会で検討し、太宰府市公文書館（太宰府アーカイブ）の設置を市当局に提言し、策定化された。同公文書館は、太宰府学研究センター部門と文書資料部門の二つの部門の設置を構想している。

市史の完成をみたので、右公文書館実現への準備階梯として市史編さん室が市史資料室に更新された。その実務が市公文書館構想実現の方向を支えるものであることは言うまでもない。市史編さんの過程で収集された膨大な史資料を公開して市民を始め多くの人々に共有の文化的財産として利用していただくことは重要であるが、そのための準備だけでも大変な作業である。既刊市史の改訂、更新も進められなければならない。その他市民への還元作業は数多くある。それに文書資料の選別・整理・保存等の諸作業がある。

そして何よりも大事なことは、市史資料室員を始め、同室を直接支える人々の不断の太宰府学研鑽である。市民への還元という啓発行為は、つきつめて研究的であることを通さないと、ほんものとは言えない。根拠の薄い口あたりのよいものなど無縁としたい。その研鑽発表の場として本誌は誕生した。太宰府市の文化的主体性を示す標柱の一つが打ち立てられた、と溢れ出るよろこびを禁じえない。市当局の協賛に感謝する。

太宰府市には太宰府学にかかわる研究誌・啓発誌をもつ機関・団体が幾つかある。大宰府遺跡の調査・研究を核に九州全体の文化的諸側面の研究に貴重な成果を挙げてきた九州歴史資料館、「日本文化の形成をアジア史的観点からとらえる」ことを眼目とし、その成果を研究誌として提示し始めた九州国立博物館など、その代表的機関である。設立の主旨によって、それぞれ太宰府研究の在り方に個性がある。太宰府市という地域そのものに立脚点をおく市史資料室の本誌は、これらの機関と緊密な協力関係を保ちながら、その主体性を強化し、すぐれた成果を挙げて行かねばなるまい。

終わりに、本誌の発展を望みつつ、太宰府学とは何か、筆者なりの理解を改めて述べ、結びとしよう。太宰府学とは、アジアの視点から太宰府―九州や日本を見直し、太宰府に生かされ太宰府に生きる意味を探求する綜合科学としての地域学である。